

北海道方言における自発の助動詞サルの使用実態 —主に世代差・男女差について—

秀 舞 子

I はじめに

北海道方言の助動詞「～さる」*1は自発、可能、結果の状態などの多様な意味を持ち、北海道民にとっては欠かすことのできない便利な表現手段である。例えば、エレベーターのボタンを誤って押してしまった時には、「～さる」を使って「押ささっちゃった」などと言う。この「話し手の意思に関係なくこうなった」というような「～さる」が持つ独自のニュアンスを、他の表現で言い表すことは難しい。今日、北海道方言の助動詞「～さる」は日常の会話の中で頻繁に使用されるのはもちろんのこと、小説やメディアなど*2においてもその使用が見られる。

北海道方言の助動詞「～さる」についてはこれまで多くの研究がなされてきたが、「～さる」の文法的記述について述べたものがほとんどであり、その使用実態についてはまだ明らかにされて部分が多いように思われる。そこで、「～さる」の使用実態を調べることによって、「～さる」に関する新たな事実を発見できるのではないかと考えた。本研究の目的は、北海道方言話者による助動詞「～さる」の使用について、幅広い年代の人を対象にアンケート調査を行い、その使用実態について世代差や、性差などの様々な観点から分析することである。また、「見る」などの四段活用以外の二拍動詞の「～さる」形についても調査を行ない、その使用実態や揺れなどを指摘する。

II 先行研究

まず、先行研究について、意味用法別に整理する。

1. 自発（非意図）

まずは、自発の用法についてである。この用法は「非意図用法」*3と呼ばれることもある。北海道方言の助動詞「～さる」について筆者が確認できた最も古い記述は、石垣（1976）である。石垣（1976）は、海岸の言葉として自発の助動詞「サル」「ラサル」を挙げ、共通語で「自然に泣けてくる」というべきところを、道南では「泣ガサル」と言う」と説明している。石垣（1985）では、サルが「（自然に）そうなる」という意味を持つ助動詞であり、「泣かサル」というような言い方が全道的に広く用いられるとしている。ほかにも、「目覚まし時計が鳴らないうちに起きラサッタ（ひとりでに目がさめてしまった）」(p.391)、「ひとりでに走ラサッタ」(p.149)などの例を挙げていた。また、四段活用の動詞の未然形には「笑ワサル」のようにサルをつけ、四段活用以外の動詞の未然形には「見ルナッテバ、ナオ見ラサル」のようにラサルをつけて用いるというように、サルとラサルの間にはっきりとした分担があるとも説明している。さらに、自発表現のサルが青森や岩手などにも見られることにも言及していた。小野（1987）は、自発や可能の言い方に「サル・ラサル」が用いられるとし、

自発表現の例として「問題集のうしろの回答をすぐに見ラサル」(p.140)を挙げている。石垣(1997)は「サル」が「自然に〇〇せずにはいられないという切迫した」情を表現するのに適切な言葉であると述べている。「来る気でなかったのにこラサッタ」(p.321)のように、あらゆる動詞について自発表現ができるという。菅(2017)は、バスの降車ボタンに荷物がふれて「おささってしまった」のように、自分のせいではなく自然にそうなったのだという言いのがれの気持ちを表す「～さる」の用法を説明している。

2. 可能

つづいて、可能用法について見ていく。北海道新聞社(1983)は、全国共通語では「書ける、書けない」と可能動詞の形で表現するところを、北海道では自発の助動詞「サル」を使って「ガラスにはマジックインキでなら字が書かサルが、ボールペンでは書カサラナイ」のように言う述べている。石垣(1985)は、サルを「～できる」という可能の意味にも用いる人がいるとし、この用法は自発から派生したものと思われるが、全道的にみると自発の用法ほど優勢ではない^{*4}ことを指摘している。小野米一(1987)は、「この鉛筆うまく書かサラナイ」のように使う、可能・自発の助動詞サル・ラサルがかなり多く聞かれるとしている。平山(1997)は、海岸部方言に分類される奥尻島方言の助動詞についての項目で、可能表現として「レル・ラレル」「エル・ラエル」に加えて、自発にも使用される「サル・ラサル」が使われると述べている。円山(2016)は、ラサルの可能用法について、「あの選手なら100m10秒で走らさる。(走れる)」(p.255)のような能力可能や「焼肉食べ放題だったら、なんぼでもおかわりして食べらさる。(食べられる、食べれる)」(同上)のような社会的規則に基づく可能を表すことはできないとしている。

「～さる」の可能用法の使用実態については、国立国語研究所(1965)が高校生を対象にした調査から、「こんなペンではうまく書かさらない」(p.111)のような-kakasaraの形が北海道の半島部と海岸部を中心としてほぼ全道的に使用されていることを明らかにした。

また、山崎(1994)は、-rasaruの否定がほとんどの場合、不可能を表すとしながらも、自発の否定と解釈できるものもあることを指摘している。前者の例として「部屋が狭くて布団敷かさんない(布団を引くことができない)」(p.232)、後者の例として「屋根の勾配が急だから雪積もらさらない。(雪が屋根に乗らない)」(p.233)を挙げ、話者の予想していた望ましい結果が得られない場合に不可能、その予想外の出来事が話者にとって望ましいことである場合には自発の否定と解釈できるようだと考察している^{*5}。

3. 結果の状態

次に、結果の状態を表す用法についてである。「～さる」のこの用法については、研究者によって様々な名称がつけられている。代表的なところでは、山崎(1994)が「非情物に出現する結果の状態」、佐々木(2007)が「逆使役^{*6}」、円山(2016)が「事

態実現用法」などと呼んでいる。

山崎(1994)は、-rasarが非情物に出現する出来事や結果を表すことができるとし、「御飯炊かされた(炊きあがった)」(p.231)や「放っと思ったら凍らされた(凍ってしまった)」(p.232)などの例を挙げている。

佐々木(2007)は、逆使役とは「大きな丸が書かさってる。」(=大きな丸が書いてある[逆使役])(p.259)のように、他動詞主語が削除され他動詞目的語が自動詞主語に対応する場合を指すと述べている。また、逆使役用法は他の用法と違い非意図や可能などの意味的な特徴がなく、逆使役用法の自発述語はアスペクトとしては達成(achievement)であることを指摘した。

円山(2016)は、事態実現用法が「自然現象」と「対象の変化」という二つの下位分類を持つことを指摘している。「自然現象」とは「この辺りはもう雪がとけらさってる。」(p.261)のようなもの、「対象の変化」とは「お風呂が沸かされたよ。」(p.262)のようなものを指す。この用法では、出現した事態もしくは対象に起きる変化の終結局面が強調されるために、「成り行きの事態が生じたと捉える傾向」があるとしている。

4. 先行研究のまとめ

以上の先行研究から、北海道方言の助動詞「～さる」には、主に自発(非意図)、可能、結果の状態の用法があることが分かった。また、これまでの研究では助動詞「～さる」意味的特徴や、どのような動詞に「～さる」が付くのか、「～さる」の活用といった形態的特徴に関して述べたものが中心であった。一方で、「サル」の各用法が世代別、男女別などの観点から見てどれほど使用されているかといった、「～さる」の使用実態を調査することはこれまでほとんど行われていないようである。

先行研究の変遷をながめてみると、石垣(1976)や小野(1987)を始めとする初期の研究では主に「～さる」の自発や可能の意味を取りあげていたのに対し、近年では山崎(1994)の「非情物に出現する結果の状態」や佐々木(2007)の「逆使役用法」など、初期の研究とは異なる用法についての分析が進められている。この推移は「サル」の使用実態が自発用法から結果を表す用法へと推移していることを暗示しているようにも思われる。現に、石垣(1985)が自発用法ほど優勢ではないとしていた可能用法も、現在では「～さる」の基本的な意味の一つとして記述されることが多い。以上のことから、北海道方言の助動詞「～さる」の中心的な意味が自発から可能、そして結果の状態へと変化しているのではないかという仮説が立てられる。この仮説に基づいて、アンケート調査結果の分析を進めていく。

なお、「～さる」の使用実態について分析するにあたっては、「～さる」の意味を「自発」と「結果」の二つに大別して考えることにする。先行研究の記述をふまえ、筆者は「自発」を「主語が有情物主語(一人称)であって、話者が意図せずに自然とある動作をしてしまうことを表す」用法、「結果」を「主語が無情物主語^{*7}であって、話者の予想意図しない結果がいつのまにか起こったことやその残存を表す」用法であると定義した。結果の用法は、下位分類として可能や受身など、自発以外のすべての用

法を含む。

Ⅲ 調査（１）各用法別の使用実態調査とその考察

1. 調査概要

北海道方言の助動詞「～さる」の意味用法別の使用実態を明らかにするために二つの調査を行った。一つ目は、2017年8月19日から9月30日にかけて、アンケート用紙およびGoogleドキュメントによるアンケート調査（調査1）である。二つ目は2018年1月15日から1月24日にかけて、居住歴が北海道内に限られる藤女子大学の学生41名（内居住歴が札幌に限られる者23名、年齢層は10～20代の若年層）を対象に行ったもの（調査2）である。

調査1の調査対象は、北海道出身の10代から80代の男女57名である。ただし、幼少期を北海道外で過ごした20代女性1名を含んでいる。回答者の世代、性別ごとの人数の内訳は以下の表1の通りである。

表1：調査1 回答者の内訳

	男性	女性	合計(人)
10代	1	3	4
20代	1	12	13
30代	0	4	4
40代	2	5	7
50代	4	7	11
60代	5	4	9
70代	5	3	8
80代	1	0	1
合計(人)	19	38	57

なお、アンケート結果の集計にあたっては、10代から30代を若年層、40代から50代を中年層、60代から80代を老年層として分類した。

北海道方言の助動詞「～さる」について、回答者自身が以下のような表現を使用するかどうかを「はい」か「いいえ」の二択で回答してもらった。また、下記の例文に挙げられた動詞以外で、回答者自身が「～さる」の形で使用する動詞があれば、使用する状況とともに自由に記述してもらった。

1. 電気のスイッチが押ささる。
2. 寝ている間にごはんが炊かさる。
3. 見るなど言われるとなおさら見らさる。
4. 大雪で電車が止まらさる。
5. 雨で窓が汚ささる。

6. 締め切りが近くて焦らさる。
7. ズボンのすそが長くて床が拭かさる。
8. スペースがなくて何も置かさらない。
9. この消しゴムはあまり消ささらない。
10. 動く歩道に乗るとどンドン歩かさる。
11. 天気がよくて洗濯物がよく干かさる。
12. このお菓子はおいしくて沢山食べらさる。
13. 悲しい映画を観てつつい泣かさった。
14. 荷物が多くてカバンが二つに分けらさる。
15. 気になる映画があつて映画館に行かさる。
16. カバンの中で紙が折らさっていた。
17. 風で部屋の扉が開かさる。
18. ノートに文字が書かさっていた。
19. 大きな音がして起きらさった。
20. 写真が撮らさっていた。

2. 調査結果

2-1. 世代差

調査1について世代差の観点から考察する。表2は、各回答者がアンケート項目1～20のような「～さる」をどの程度使用しているかについて、その使用率を世代ごとに示したものである。なお、使用率とは全回答数^{*8}に占めるの「はい」の割合を算出したものである。

50%以上の使用を高率とみなすと、世代ごとの使用率のあらわれ方から、20の質問項目を以下の三つに分類することができる。

- a. 若年層が50%以上の項目：1、7、16、18、20
- b. 中年層が50%以上の項目：1、2、8、10、11、16、18
- c. 高年層が50%以上の項目：2、3、7、8、10、11、12、13、16、17、18

上記のa～cの各分類に含まれる助動詞「～さる」について、それぞれの文法的特徴や意味的特徴を見てみる。

まず、aの傾向を示した例文はいずれも電気のスイッチや写真など、感情を持たない無情物が文の主語となっている。他の年代に比べて若年層が多い項目は1と20であり、これらはいずれも「結果」を意味している。1「押かさる」は「意図せずにボタンを押してしまった」という事態を表す結果の意味と、「ボタンを押すことができる」という可能の意味のどちらとも解釈することができる。20は「～さる」の過去形を使っており、「(シャッターを押したつもりはないのにいつのまにか) 写真が撮れていた」という、結果に着目した用法である。

表2：調査1の結果（世代差）

	若年層			中年層			高年層			合計			
	はい	回答数	使用率	はい	回答数	使用率	はい	回答数	使用率	はい	回答数	使用率	
設 問 番 号	1	19	21	90%	12	18	67%	7	18	39%	38	57	67%
	2	8	21	38%	10	18	56%	13	18	72%	31	57	54%
	3	3	21	14%	5	18	28%	10	18	56%	18	57	32%
	4	2	21	10%	0	18	0%	0	18	0%	2	57	4%
	5	0	21	0%	0	18	0%	0	18	0%	0	57	0%
	6	3	21	14%	5	18	28%	6	18	33%	14	57	25%
	7	11	21	52%	8	18	44%	9	18	50%	28	57	49%
	8	6	21	29%	14	18	78%	15	17	88%	35	56	63%
	9	4	21	19%	5	18	28%	5	18	28%	14	57	25%
	10	7	20	35%	9	18	50%	9	18	50%	25	56	45%
	11	4	21	19%	12	18	67%	11	18	61%	27	57	47%
	12	4	21	19%	7	18	39%	9	18	50%	20	57	35%
	13	3	21	14%	6	18	33%	13	18	72%	22	57	39%
	14	0	21	0%	6	18	33%	4	18	22%	10	57	18%
	15	1	21	5%	4	18	22%	5	18	28%	10	57	18%
	16	15	21	71%	16	18	89%	13	17	76%	44	56	79%
	17	6	20	30%	9	18	50%	9	18	50%	24	56	43%
	18	11	21	52%	12	18	67%	12	18	67%	35	57	61%
	19	0	21	0%	2	18	11%	3	18	17%	5	57	9%
	20	11	21	52%	6	18	33%	6	18	33%	23	57	40%

次に、bに分類された例文についてである。主語に注目すると、1、2、8、11、16、18が無情主語をとっている。一方、10は文中には明記されていないものの、感情を持つ人が主語であると考えられる。無情主語をとる例文の意味を見てみると、8は「スペースがないという状況が理由で何も置くことができない」という不可能の意味である。そして、2は「寝ている間に（知らないうちに）ごはんが炊けていた」、18は「（気が付いたら）ノートに文字が書かれていた」、16は「（知らないうちに）カバンの中で紙が折れていた」という意味であり、全て結果に焦点を当てた言い方である。一方、有情主語をとる10の用法をながめてみると、「動く歩道に乗ると（そのつもりがなくても）どんどん歩いてしまう」という、「自然とそうなる」といったニュアンスが含まれる自発の用法であった。以上のことから、中年層において使用率が高いものには有情主語をとるものと無情主語をとるものがあり、有情主語の文は自発の用法、無情主語の文は結果の用法であった。

そして、cの分類ではaとbの分類に比べ、3「見らさる」、12「食べらさる」、13「泣かさった」のように主語が有情主語、すなわち話者である例文が多く見られた。この

ことから、高年層では、他の世代に比べて、主語が有情主語であり自発の意味をあらわす「～さる」の用法の使用率が高いと言える。

若年層における使用が少なく、中年層以上の使用が目立つものは、2、3、8、10、11、12、17、18である。このうち3、10、12、13は筆者が定義した「自発」の用法に該当する。一方、8は可能、17は自然現象でありいずれも意図しない行為の結果という意味は持たない。また、11は「自然に乾く」という自然現象を意味しており、18は人の行為であるか自然現象であるかの特定が難しい。若年層の分類では見られなかった自発の用法が中・高年層では見られたことから、若年層は中・高年層に比べて自発用法の「～さる」をあまり使用しないと言えそうである。

さらに、a～cのいずれにも含まれなかった用例の使用率を世代ごとに比較してみると、特に自発の用法において、世代が上がるにしたがって使用が増えていることが確認できる。

	若年層	中年層	高年層
4 (自然現象) :	10% →	0% →	0%
5 (自然現象) :	0% →	0% →	0%
6 (自発) :	14% →	28% →	33%
9 (状況可能) :	19% →	28% →	28%
14 (受け身) :	0% →	33% →	22%
15 (自発) :	5% →	22% →	28%
19 (自発) :	0% →	11% →	17%

全体的に見ると、特に若年層においては、aに見られるような結果用法の「～さる」の使用が多かった。しかし、自発用法の例文(3, 6, 10, 12, 13, 15, 19)の使用率は10「歩かさる」の35%を除いては全て20%以下であった。このことから、若年層において自発の用法での「～さる」の使用が衰退していることがうかがえる⁹⁾。一方、若年層では衰退が見られた「～さる」の最も基本的な用法である自発の「～さる」が、中・高年層には根強く残っていると見える。文の主語について見ると、若年層は人以外のものが主語となる無情主語の「～さる」の使用率が高く、中・高年層では無情主語の「～さる」に加えて、有情主語の「～さる」の使用も多かった。このような違いが現れたのは、中・高年層でより使用率の高かった自発用法の「～さる」の主語が全て有情主語であるためと考えられる。

つまり、若年層が専ら持っている「～さる」の意味認識は、意図しない行為によって生じた結果を、物(無情主語)を主語にして表現するということであり、それ以外の用法、特に自発の用法は「～さる」の用法として若年層に認識されていないと言えそうである。

次に調査2の結果を見ていく。この調査は、調査1と同様のアンケート用紙に、回答者の居住歴を問う項目を加えて行ったものである。

調査1のアンケート結果と比較すると、2、17の項目が50%を超えている点が異

なっているが、自発の例（3、6、10、12、13、15、19）はいずれも使用率が低いことが確認できる。このことから、やはり若年層において自発用法の「～さる」が衰え、結果の用法に移行していると考えられる。

表3：調査2結果（居住歴が北海道内に限られる若年層・女性）

		使用	不使用			使用	不使用
設 問 番 号	1	39 95.12%	2 4.88%	設 問 番 号	11	11 26.83%	30 73.17%
	2	26 63.41%	15 36.59%		12	8 19.51%	33 80.49%
	3	6 14.63%	35 85.37%		13	4 9.76%	37 90.24%
	4	0 0%	41 100%		14	1 2.44%	40 97.56%
	5	1 2.44%	40 97.56%		15	2 4.88%	39 95.12%
	6	4 9.76%	37 90.24%		16	30 73.17%	11 26.83%
	7	25 60.98%	16 39.02%		17	22 53.66%	19 46.34%
	8	14 34.15%	27 65.85%		18	36 87.80%	5 12.20%
	9	8 19.51%	33 80.49%		19	1 2.44%	40 97.56%
	10	12 29.27%	29 70.73%		20	32 78.05%	9 21.95%

2-2. 性差

次に、調査1から、回答者の性別によって「～さる」の使用率にどれほど差が現れたのかについて見ていく。以下の表4は、各回答者が1～20のような「～さる」をどの程度使用しているかを、性別ごとに示したものである。全回答数^{*10}に占める「はい」の割合を使用率として算出した。

全体的に見ると、男性の平均使用率は41%、女性は36%とやや男性の方が高かった。男性と女性で使用率にとくに大きな差が見られた項目は、3、7、8、11、15、16、17、18、19であった。そのうち、女性の使用率が男性を上回っていたのは7のみであり、他の項目についてはいずれも男性が女性を上回っていた。

性別によって、わずかながら「～さる」の使用率に差が見られたが、このような違いの要因として、使用する「～さる」の違いが考えられる。男性と女性で使用率に大きな差が見られた項目における「～さる」の意味を検証してみたい。以下の表5は、とくに差が見られた項目の「～さる」の用法や使用率の違いをまとめたものである。女性の使用率が男性より高い設問についてはグレーで示した。

「～さる」の用法をながめてみると、自発と結果の両方の意味において、「～さる」

の使用に性差が出ていることがわかる。女性より男性の使用率が高い8項目には、自発の用法が二つと結果の用法が六つ含まれていた。このことから、男性は女性より自発の「～さる」を使用すると言えるのではないか。

表4：調査1結果（性差）

設 問 番 号	男 性			女 性		
	は い	回 答 数	使 用 率	は い	回 答 数	使 用 率
1	12	19	63%	26	38	68%
2	10	19	53%	21	38	55%
3	7	19	37%	11	38	29%
4	0	19	0%	2	38	5%
5	0	19	0%	0	38	0%
6	5	19	26%	9	38	24%
7	8	19	42%	20	38	53%
8	14	18	78%	21	38	55%
9	4	19	21%	10	38	26%
10	8	19	42%	17	37	46%
11	12	19	63%	15	38	39%
12	7	19	37%	13	38	34%
13	8	19	42%	14	38	37%
14	4	19	21%	6	38	16%
15	6	19	32%	4	38	11%
16	15	18	83%	29	38	76%
17	11	19	58%	13	37	35%
18	13	19	68%	22	38	58%
19	4	19	21%	1	38	3%
20	7	19	37%	16	38	42%
合 計	155	378	41%	270	758	36%

表5：性差が大きかった「～さる」とその意味（調査1による）

設 問 番 号	使 用 率	質 問 内 容	「～さる」の用法
3	男性 > 女性	見らさる	自発
7	男性 < 女性	拭かさる	結果
8	男性 > 女性	置かさらない	結果(不可能)
11	男性 > 女性	干かさる	結果(可能)
15	男性 > 女性	行かさる	自発
16	男性 > 女性	折らさっていた	結果
17	男性 > 女性	開かさる	結果
18	男性 > 女性	書かさっていた	結果
19	男性 > 女性	搬らさっていた	結果

IV 四段活用以外の二拍動詞の「～さる」使用実態調査とその考察

先述のように、四段活用の動詞の未然形にはサルがつき、四段活用以外の動詞にはラサルをつけて用いる（石垣 1985）。ところが、研究を進める中で、この法則にあてはまらない例を目にした。北海道の就職情報サイト「ジョブキタ新卒 2018」のインターネット広告で、「WEBで見ささる、合説で聞かさる、個別相談会で言わさる」とあったのだ*11。ここで注目したいのは、「見ささる」という形である。石垣（1985）に従えば、「見る」は一段活用の動詞であるから、ラサルがついて「見ラサル」となるはずであるが、ここではそうになっていない。

この「見ささる」という表現から、四段活用以外の動詞に「～さる」をつけた形には揺れが見られるのではないかと考えた。石垣（1985）の記述から時を経て、現在では四段活用以外の動詞、その中でも特に「見る」のような二拍動詞の「～さる」形として、「～らさる」よりも「～ささる」の形の方が、支持されるようになっていることが予想される。

このような「～さる」の形式的ゆれについては、山崎（1994）と佐々木（2017）がすでに言及していた。山崎（1994）は、「沸く」に -rasaru をつけた「沸かさる」に対して、「沸さらさる」、「転がささる」に対して「転がさる」という形式があると説明している。また、佐々木（2017）は変格活用動詞の自発述語について、「来らさる」が「来ささる」、「ささる」「しらさる」が「しささる」になるといった、形式的な揺れがあることを指摘した。「沸かさる」に対する「沸からさる」のような形式を「ラ入れ形」、「読まさる」に対する「読まささる」のような形式を「サ入れ形」と呼んでいる。また、サ変動詞「する」のさる形として、sasaru と sirasaru があるとした上で、10代から20代の男女を対象としたアンケート調査から、サ変動詞については「ささって」や「しらさって」よりも「しささって」を選択する者が多いことを明らかにしている。

1. 調査概要

今回の調査では、「見る」を含めた四段活用以外の二拍動詞の「～さる」形として、「未然形+らさる」と「未然形+ささる」のどちらの形が最も使用されているのかを明らかにするため、少人数を対象とした追加調査（調査3）を行った。

調査3は2017年11月10日から11月21日にかけて、アンケート調査（アンケート用紙、LINE）によって行った。調査対象は北海道出身の10代から20代の男女21名である。ただし、幼少期を北海道外で過ごした20代の女性1名を含んでいる。回答者の世代、性別ごとの人数の内訳は以下の表6の通りである。

表6：調査3回答者の内訳

	男性	女性	合計(人)
10代	1	4	5
20代	0	16	16
合計(人)	1	20	21

アンケートの内容は、北海道方言の助動詞「～さる」について、回答者自身が以下のような一段活用¹の二拍動詞の「～さる」形としてa～dのうちどれを使用するか、当てはまるものを一つ選んでもらうというものであった。

1. 見る
 - a. 見らさる b. 見ささる c. aとdどちらも使用する d. どちらも使用しない
2. 着る
 - a. 着らさる b. 着ささる c. aとbどちらも使用する d. どちらも使用しない
3. 来る
 - a. 来らさる b. 来ささる c. aとbどちらも使用する d. どちらも使用しない
4. 煮る
 - a. 煮らさる b. 煮ささる c. aとbどちらも使用する d. どちらも使用しない
5. する
 - a. しらさる b. しささる c. aとbどちらも使用する d. どちらも使用しない
6. 寝る
 - a. 寝らさる b. 寝ささる c. aとbどちらも使用する d. どちらも使用しない

2. 調査結果

調査2の結果は以下の表7の通りである。1～6の動詞の「～さる」形として、a～dのうちどれを使用するかについて尋ねた結果をまとめている。1～6の各項目について、a～dそれぞれの回答数とその使用率を示している。

全体的に見ると、四つの選択肢a～dのうちdの割合が44%と最も高かった。反対に、最も割合が低いのはcの10%であった。aとdについてはあまり大きな差がみられなかった。世代差の章で見たように、若年層においては「～さる」の自発用法が衰退していた。調査②では「見る」や「来る」など自発の用法で使われる動詞が多く含まれていたため、若年層を対象とした今回の調査ではd「どちらも使用しない」の割合が高くなったのではないかと考えられる。

設問ごとに見ると、1「見る」と2「着る」については「～らさる」と「～ささる」をc「どちらも使用できる」と回答した人の割合も高く、全体的にゆれが大きかった。しかし、3「来る」、4「煮る」、5「する」、6「寝る」については、aもしくはbに回答がある程度偏る結果となった。このことから、これらの動詞に「～さる」をつけて使用する場合の「～らさる」と「～ささる」の使い分けは、「煮る」には「～らさる」をつけ、「する」には「～ささる」をつけるといったように、各動詞によってある程度決まっているようである。ただし、今回の調査は若年層のみを対象として行

なったものであるため、中・高年層においても若年層と同様にこのような「～さる」の使い分け認識があるかどうかは定かではない。

表 7：調査 3 結果

選択肢	動詞						合計
	1 見る	2 着る	3 来る	4 煮る	5 する	6 寝る	
a ～らさる	7 33%	2 10%	2 10%	12 57%	0 0%	7 33%	30 24%
b ～ささる	1 5%	5 24%	7 33%	1 5%	12 57%	1 5%	27 21%
c どちらも使用	6 29%	4 19%	1 5%	1 5%	1 5%	0 0%	13 10%
d どちらも不使用	7 33%	10 48%	11 52%	7 33%	8 38%	13 62%	56 44%
合計	21	21	21	21	21	21	126

少なくとも、この調査から分かることは、「～さる」は四段活用の動詞の未然形につき、それ以外の動詞の未然形には「～らさる」を使用するという本来の規範（石垣 1985）に変化が生じているということである^{*12}。また、ジョブキタ新卒 2018 の広告で見られた「見ささる」以外にも、「来る」や「さる」など、「～ささる」の形で使われている動詞があることが明らかになった。

では、「～さる」と「～らさる」の使い分けがある程度決まっている動詞（来る、煮る、する、寝る）について、北海道方言話者はどのようにして、いずれかの形を選択しているのか。また、両方の形使用する人が多かった動詞（見る、着る）については、どんな場合に「～らさる」もしくは「～ささる」を選択するのか。使い分けの基準の一つとして考えられるのは、それぞれの形がプラスもしくはマイナスのニュアンスを持つのではないかということである。これはゼミにおける議論の中から出た意見であるが、筆者自身も大いに賛同できる考えであったため、ここで紹介しておきたい。例えば、「着る」に助動詞「～さる」をつけた文の形としては、以下の 2 種類がある。

- a. コートが着らさる。
- b. コートが着ささる。

「～らさる」を使ったaから「(外の気温が低く寒いため、着たくはないがやむを得ず) コートを着る」というネガティブな印象を受けるのに対し、「～ささる」を用いたbからは「(デザインなどが可愛いコートであるため、自ら進んで) コートを着る」といったポジティブな感じを受ける。このことから、「～らさる」に比べ、「～ささる」の方が「主体的かつ積極的に物事を行う」という、プラスのニュアンスを持つのではないかと推測される。一方の「～らさる」は「自ら進んで行っわけではないが、結果的にそうなる」といったマイナスのイメージを持つ。そう考えると、ジョブキタ新卒2018の「見ささる」を使用した広告は、北海道で就職することについて見る人に前向きな印象を与えようとする商業的な理由から「～ささる」を採用したのではないだろうか。筆者自身の内省からも、「見らさる」の方が受動的な表現であり、一方の「見ささる」は「見ることができる」という状況可能の意味も持つように思う。

四段活用以外の二拍動詞の「～さる」形について、より具体的な状況設定をした文の中での使用についてアンケートを取れば、ニュアンスによる「～さる」形の使い分けの有無を明らかにできたかもしれない。また、「する」の「～さる」形として「ささる」があることも考慮に入れておくべきであった。今回のアンケート調査では二拍動詞のみを取り上げたため、三拍以上の動詞^{*13}にも「～ささる」の形が使用されるのかについては、今後調査を行う必要があるだろう。ただ、筆者は自身の語感では、「考える」や「食べる」などの三拍動詞に対して「～ささる」は使用できないと考えている。

V おわりに

本論では、北海道方言の助動詞「～さる」の使用実態について、アンケート調査の結果を基に論じた。先行研究における研究対象の推移から、「～さる」の中心的な用法が変化しているのではないかと予測した通り、「～さる」の用法を「自発」と「結果」の二つに大別して結果を分析したことで、用法の変化を捉えることができた。アンケート調査の結果を世代別に見た場合に、若年層ほど自発よりも結果用法の「～さる」を使用する傾向にあり、中・高年層には自発の「～さる」が根強く残っていることが分かった。また、四段活用以外の二拍動詞の「～さる」形にはゆれが見られた。このように、これまであまり研究されてこなかった、使用実態という観点から北海道方言の助動詞「～さる」について研究したことで、新たな事実を明らかにすることができた。今後、さらに北海道において自発用法の「～さる」の衰退が進み、結果の用法がますます優勢になることが予測される。

なお、今回の調査で明らかにできなかった、北海道内における「～さる」の使用の地域差や「～さる」が持つプラスやマイナスなどのイメージについては、今後の課題としたいと思う。

<注>

*1 先行研究ではこれをサル・ラサルや - rasaruなどと様々に表記しており、そのまま記すが、筆者は本論において「～さる」という表記を用いることとする。

- *2 山崎 (1994) は、小林多喜二の小説に -rasaru を使った表現があることを指摘している。メディアについては、筆者が「どさんこワイド 179 奥様ここでもう一品」(STVテレビ)において、以下のような使用例を確認した。
…ひっくり返して、ホッキが中に炒まされますようにしましょう。(2017年10月31日放送どさんこワイド 179 奥様ここでもう一品)
- *3 丸山 (2016) は、「自発」という用語に対応する訳語 spontaneous が「非意図行為だけではなく自然現象などの広い範囲の意味を表」し、事態実現用法の内容まで含むことから、動作主の意図によらない行為については「自発」ではなく「非意図」という用語を使用している。
- *4 飯豊ほか (1998) は、北海道内陸部の可能表現について、「書くニイイ」のような言いかたはやや古く、「書かサラない」はやや新しい言いかたであると述べている。
- *5 ここから、石垣 (1985) が指摘した、自発用法から可能用法への連続性を見ることができないのではないか。
- *6 井上 (2015) は、佐々木 (2007) の「逆使役用法」があくまで形態論的な分類であり、意味的な分類 (用法) とは区別して考える必要があると述べている。
- *7 「～さる」を含む文中で、無情物主語は通常ガ格によって標示されるが、「めがね (が) 曇らさった。」(山崎 1994:229) のように助詞を使用しない場合もある。
- *8 設問は全 20 問であったが、一部回答漏れがあった人については回答数が 19 問となっている。
- *9 自発用法の衰退
アンケート調査①の自由記述に対する若年層の回答結果からも、自発用法の衰退がうかがえた。一方、中・高年層の回答には自発の用例が見られた。
例：・タオルケットまかさる (10 代女性)
・「～さる」のうち消しですが、エレベーターのボタンが (押したつもりが) 点滅していなかった時、「押ささってない」と言います。(20 代女性)
・つつい走らさる (疲れて座らさる) (40 代女性)
・まちがわさる。(50 代女性)
- *10 *8 に同じ。
- *11 札幌市営地下鉄の駅構内や車内に貼られた同サイトの広告では、「検索ボタンも押ささる」という表現も使用されていた。
- *12 佐々木 (2017) は、-sasar を含む形式が標準語の影響によって生じたネオ方言であると分析している。
- *13 調査②において、北海道出身者の回答者から、「ゆでる」の「～さる」形として「ゆだらさる」を使うという意見が聞かれた。

<参考文献>

- 飯豊毅一ほか編 (1998) 『講座方言学 4—北海道・東北地方の方言—』国書刊行会
石垣福雄 (1976) 『日本語と北海道方言』北海道新聞社
石垣福雄 (1985) 『北海道方言辞典』北海道新聞社

- 石垣福雄 (1994) 「北海道の方言研究を振り返る」『北海道方言研究会 20 周年記念 論文集ことばの世界』(北海道方言研究会叢書第 5 巻)pp.4-10. 北海道方言研究会
- 石垣福雄 (1997) 『増補改訂版北海道の方言紀行』北海道新聞社
- 井上拓也 (2015) 「北海道方言における『逆使役構文』に関する認知的考察」『日本 認知言語学会論文集』15 巻 pp.183-195. 日本認知言語学会
- 井上史雄・吉岡泰夫 (2004) 『北海道・東北の方言一調べてみよう暮らしのことば』 ゆまに書房
- 氏家啓吾 (2016) 「北海道方言 -rasar 構文の表す捉え方—認知文法の視点から—」 『東京大学言語学論集』第 37 号 pp.261-279. 東京大学大学院人文社会系研究科・ 文学部言語学研究室
- 小野米一 (1987) 『おぼんでした北海道方言の旅』北海道新聞社
- 小野米一・奥田統己 (1999) 『北の生活文庫 8 北海道のことば』北海道新聞社
- 小野米一 (2001) 『移住と言語変容—北海道方言の形成と変容—』溪水社
- 木部暢子ほか編著 (2014) 『方言学入門』三省堂
- 工藤真由美・八亀裕美 (2008) 『複数の日本語方言からはじめる言語学』講談社
- 国立国語研究所 (1965) 『国立国語研究所報告 27 共通語化の過程—北海道におけ る親子三代のことば—』国立国語研究所
- 小林隆・篠崎晃一編 (2003) 『ガイドブック方言研究』ひつじ書房
- 小林隆ほか (2006) 『シリーズ方言学 2 方言の文法』岩波書店
- 佐々木冠 (2007) 「北海道方言における形態的逆使役の成立条件」『他動性の通言語 的研究』pp.259-270. くろしお出版
- 佐々木冠 (2015) 「北海道方言における形態的逆使役の類型論的位置づけ」『認知日 本語学講座第 6 巻認知類型論』第 4 章 p.163-211. くろしお出版
- 佐々木冠 (2017) 「北海道方言における自発語形のゆれ」関西言語学会第 42 回大 会@京都大学吉田キャンパス pp.1-14.
- 菅泰雄 (2017) 「いいっしょ北海道弁」『道新こども新聞週間まなぶん』2017 年 2 月 25 日 5 面
- 竹田晃子 (1998) 「岩手県盛岡市方言におけるサル形式の意味的特徴」『国語学研究』 第 37 集 pp.23-34. 東北大学文学部国語学研究室「国語学研究」刊行会
- 平山輝男編著 (1983) 『全国方言辞典 [1] 一県別方言の特色』角川書店
- 平山輝男編著 (1997) 『日本のことばシリーズ 1 北海道のことば』明治書院
- 平山輝男編著 (2003) 『日本のことばシリーズ 2 青森県のことば』明治書院
- 平山輝男編著 (2001) 『日本のことばシリーズ 3 岩手県のことば』明治書院
- 藤原与一 (1996) 『日本語方言辞書—昭和・平成の生活語—<中巻>』東京堂出版
- 北海道新聞社編 (1983) 『ほっかいどう語』北海道新聞社
- 松田哲 (2015) 「コミュニケーションにおける性差についての考察—『車のエンジ ンがかからないの』を事例に—」『流通経済大学スポーツ健康科学部紀要』第 8 巻 pp.49-54. 流通経済大学
- 円山拓子 (2007) 「自発と可能的対照研究—日本語ラレル, 北海道方言ラサル, 韓

- 国語 cita—』『日本語文法』7巻1号 pp.52-68. 日本語文法学会
- 円山拓子 (2016) 『ひつじ研究叢書<言語編>第141巻韓国語 cita と北海道方言ラサル日本語ラレルの研究』ひつじ書房
- 山崎哲永 (1994) 「北海道方言における自発の助動詞 -rasaru 用法とその意味分析」『北海道方言研究会 20 周年記念論文集ことばの世界』(北海道方言研究会叢書第5巻)pp.227-237. 北海道方言研究会
- 山田敏弘 (2007) 「日本語における自他の有対性と他動性—岐阜県方言の自動詞『おぼわる』『鍛わる』『のさる』『どかる』を通して—」『他動性の通言語的研究』pp.271-282. くろしお出版

〈ひで まいこ / 2018 年日本語・日本文学科卒〉